審査概要

本年度の文部科学大臣賞の選考は、令和七年四月一日から同八年三月三十一日に至る一年間に刊行された連歌・俳諧・俳句に関わる著作が対象となる。その中から候補となる著作四点を厳選して各委員に確認し、選考委員七名によるそれらの綿密な査読、その結果を持ち寄り、慎重な審議によって選考が行われた。その結果、小林孔氏・佐藤勝明氏共著『深川六歌仙評釈』（令和七年十月、ひつじ書房）を最優秀著作として推薦することに決定した。

以下、著作の概要、ならびに各委員の推薦文と当日の選考会議をもとにした審査概要を記す。

本書は、芭蕉七部集に入らなかった『深川』を、『ひさご』『猿蓑』と『すみだはら』との間に入れて、芭蕉流俳諧を把握するという視座から、『深川』所収六歌仙を読み解いている。註解は、小林・佐藤両氏の往復書簡によりまとめられたもの。各歌仙の〈解説稿〉は両氏が執筆する。さらに、佐藤氏の「付合文芸の展開と『深川』」、小林氏の「『深川』出版略史」「『深川』と『市の庵』の題号」を収載する。小林・佐藤両氏の前著『続猿蓑五歌仙評釈』と同じ方法による歌仙分析を行った本書の評釈は『深川』註解として画期的成果をあげた。

佐藤氏の付合分析の方法は、「付合文芸の展開と『深川』」と〈解説稿〉に明瞭に示されるが、「見込」「趣向」「句作」の三段階分析で、作者の思考を跡づけることにある。「付合文芸の展開と『深川』」では、連歌から初期俳諧をへて、芭蕉俳諧にいたるまで、付句作者は「自問自答を通して趣向を探った」という視点から、具体例が説明された。貞門・談林の親句と蕉門の疎句との相違も、この自問自答の趣向立てから説明されているが、説得力のある論理展開である。また形容語によって「匂」が可視化される点にも注目し、『猿蓑』で確立したこの付合手法が、非可視化がすすんで『すみだはら』期にいたると指摘した。『深川』は、芭蕉流の付合手法が門弟たちに浸透しつつも、「匂」の可視化という点では、その中間として位置づけられるとした。

小林氏は、第一歌仙の〈解説稿〉では、立句「青くても有べきものを唐辛子」成立の経緯について考証し、発句と脇との応酬に新見を加えた。また第二・三・四歌仙の〈解説稿〉では「立句と脇の呼吸」と題して緻密な解釈をする。特に、深川の第三次芭蕉庵を想定した第二歌仙の〈解説稿〉は興味のつきない考証である。第五歌仙の〈解説稿〉「本歌仙満尾と収録の意味」は、手の込んだ構成を持つこの三十六句がどういう意図のもとに作られたか、その意味を読み解いた。第六歌仙の〈解説稿〉「本歌仙成立の背景」は、この歌仙が、

洒堂の芭蕉庵滞在中に、曲翠が深川に出向いた折りに巻かれたと指摘し、洒堂・曲翠の両吟で巻かれた事情を類推する。

小林氏の「『深川』出版略史は、「京版」の初版本・初版覆刻本、「江戸版」の元文版本・寛政版本の異動を詳細に調査、検討する。また「『深川』と『市の庵』の題号」は、「深川夜遊」の四字題について考証を加え、大坂に移住した洒堂撰『市の庵』の題は、洒堂の新宅が長町六丁目にあったことによると推定した。

小林氏の考証には、芭蕉・洒堂らの関係性から導かれた第一歌仙発句の成立事情、歌仙制作の場となった第三次芭蕉庵の具体的空間の考証など、作品の背後に広がる創作空間、連衆間の関係性など『深川』の成立にかかわる新見に満ちている。

本書は綿密な調査、先行研究の批判的継承、新見の提示が十分に行われ、共同研究のあるべき姿を示した。

令和八年八月四日

文部科学大臣賞選考委員会
委員長　中嶋　隆